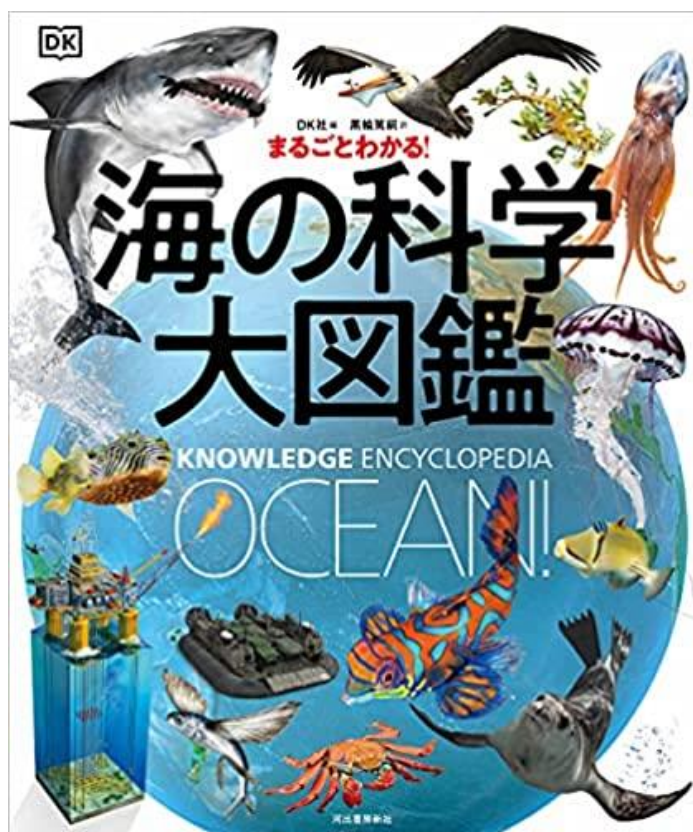


担当 1年 小山・田中
令和4年度12月号(第8号)のライブラリーニュースをお届けします。

今月号は、川口市立高等学校の先生方に聞いたおすすめの本の特集です。
文系の先生にも理系の先生にも聞いてみた結果、先生方それぞれの個性が出た、面白そうな作品がたくさん出てきました。
皆さんの興味のそそられる一冊がきっとあるはず・・・！

☆生物科 米谷裕太先生

「まるごとわかる!海の科学大図鑑」(編)DK 社(訳)黒輪篤嗣



(紹介文)こんな図鑑、見たことない!きれいな写真はもちろんのこと、
”断面”にこだわった「まるごとわかる」イラストの数々は圧巻です。
自然や生物だけでなく、地学に関する情報も満載で、
ただただ眺めているだけでも、純粹に面白いと思える一冊。
ガラパゴスイワガニの「みずでっぼう」も載っています。

☆国語科 石原直哉先生 石原先生は2冊紹介してくださいました。

『乙女の本棚』シリーズ 立東社

テーマ 文学を「画」で楽しむ



(紹介文)

『乙女の本棚』とは特定の本ではなく、シリーズ名です。文豪の名作と人気イラストレーターとのコラボレーションとして、すでに30作が販売されています。教科書にも掲載されている『山月記』『檸檬』をはじめ、いずれもビジュアルで表現されることで色彩豊かな世界が広がるものばかりです。スリルであったり、美であったり、切なさであったり、作品世界をより深く味わうことができるものばかりです。

有名作品だけれど、昔の文学だし、なかなか手が出ない……そんな人におすすめです。

『ウクライナから来た少女 ズラータ、16歳の日記』 ズラータ・イヴァシコワ著 世界文化社

テーマ 少女の「日常」と「戦争」



(紹介文)

2022年2月24日。ロシアは突然隣国ウクライナに侵攻を始めました。そして2022年が終わろうとする今もなお、侵攻は続いています。この本の著者はウクライナ人の少女、ズラータ。彼女は漫画とアニメが好きで、いつか日本に行ってみたくと夢見ていた普通の10代の少女。しかしその夢は、戦争からの避難という形で実現することになってしまいました。私たちが平和に暮らせるのは当たり前と思うかもしれませんが。誰もが当たり前だと思えることが破壊されてしまう戦争の愚かしさ。遠い国の出来事と思わず、同年代の少女の思いを通して、世界や平和について考えてみてください。

☆英語科 小松由記子先生

『君たちは、どう生きるか』吉野源三郎著 岩波文庫



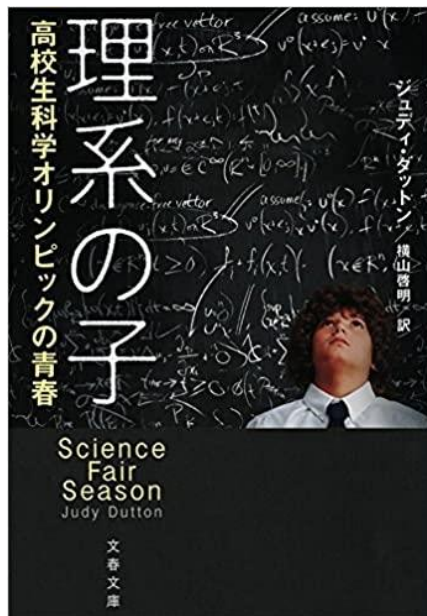
(紹介文)

お父さんを3年前に亡くした中学2年生「コペル君」こと本田潤一郎君が日常生活で直面するさまざまな問題を通して、母方の叔父さんと生き方を考えて成長していく物語。

日々の学校生活の中で起こる問題への子ども葛藤が描かれ、自分ならどう向き合うだろうかと考えさせる一冊である。

☆数学科 栗田昌典先生

『理系の子 高校生科学オリンピックの青春』ジュディ・ダットン 文芸春秋社



(紹介文)

学生の科学発表会の中で世界最大のものが、国際学生科学フェア(ISEF)です。何が世界最大かというと、発表者数、発表内容(核融合炉を作ってしまった)もそうですし、賞金もすごい。最優秀賞には7万5千ドルなど、総額は400万ドルを超えるそうです。

本書はISEFに出場する学生の活動を追ったノンフィクションです。登場する学生は様々です。少年院に入っている生徒、ここで入賞して賞を取らないと大学進学できない生徒、学校に通っていない少年。

彼ら、彼女らがそれぞれの環境の中で全力を尽くし、ISEF出場、入賞を目指し活動していく姿が描かれています。

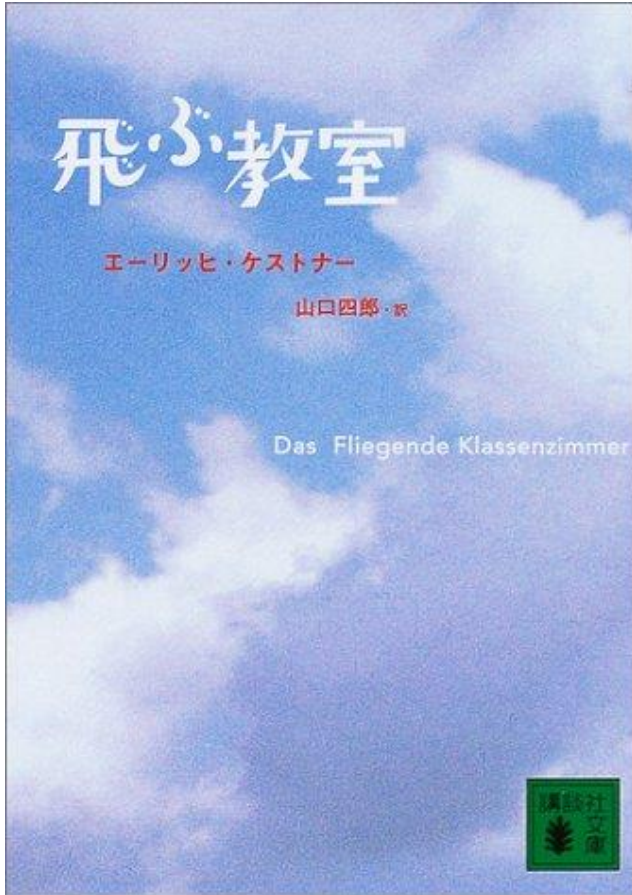
読めば感動を味わえますが、それだけではもったいない。

皆さんもISEF出場を目指しませんか？

「日本学生科学賞」「高校生科学技術チャレンジ」のどちらかの大会で上位入賞すれば、ISEF出場ができます。理系の青春を送りましょう。

☆公民科 寅野遼先生

エーリッヒ・ケストナー『飛ぶ教室』山口四郎訳、講談社文庫、2003年



(紹介文)

今回は高校生のための選書を頼まれた。選書とは悩める人のための処方箋である。どんな人に何を送ろうか。なぜか真っ先に思い浮かんだのは、電車やバスの中で、単語帳や問題集を広げながら、どこか辛そうに学校に向かう高校生だ。そんな人のための一冊が、ケストナーの小説『飛ぶ教室』である。

本書は20世紀初頭のドイツの高等中学校に通う生徒と、彼らを取り囲む大人たちの物語だ。最初は登場人物が多くてごちゃごちゃするが、彼らと一緒に学生生活を送る感覚で読んでみればいい。4月には誰が誰だかわからなかったクラスメイトも、やがてどんな子かわかってくるのと同じだ。クリスマス前の寄宿舎学校を舞台にしているので、今の時期にも最適である。

ナチスに抗った作家でもあるケストナーは、本書の冒頭で「人間はどんなにつらく悲しいときでも、正直でなければならない」(18頁)と述

べる。ここでの「正直 ehrlich」の意味は重い。誰かに言われて渋々単語帳をめくるのも、なんとなくスマートフォンでゲームをしてしまうのも、どちらも正直とは言えないのではないか。「つらく悲しいとき」どころか、日々の通学路の中でさえ、正直であることは難しい。

良い書物は、はじめて読んだ人にも、再び読んだ人にも、大切なことを教えてくれる。学生時代に本書を読んだ時に貼った付箋には、次の一文があった。今の私にとって昔以上に重く受け止めなければならない。

「教師たるものはな、つねに成長、変化する能力をもちつづける義務と責任があるんだ。(中略)われわれが必要とするのは、教師としての人間なんだ、二本足のかんづめなんかじゃない。われわれが必要とするのは、生徒を成長させようと思ったら、自分も成長せずにはいない先生なんだ」(128頁)

本書を読むと、子供にとっても、大人にとっても、学校とは大切な場所なんだと感じる。現実はその甘さでもないのであるが、それでもそう思う。学校から少し距離をとる時期だからこそ本書を手に取り、できれば楽しそうに学校に来る日を1日でも増やしてほしい。

☆地歴科 橋本武弥先生

上田紀行 編著 『新・大学でなにを学ぶか』 岩波ジュニア新書



(紹介文)

大学での学びについて、東京工業大学の先生方がそれぞれの立場で論じています。いろいろな視点で、いろいろなことが書かれていますが、リベラルアーツについて言及している先生が多いようです。「大学での学び」について、みなさんの視野を広げてくれる本だと思います。

ここで紹介した本は、
すべて図書館にあります。
この冬休みにぜひ読んでください。



書籍の画像は出版社の許可を得て使用しています。(一部申請中)

